インド・サールナートの『釈尊一代記』壁画について

宮原 豊（9 組）

今まで何回か 65 期ホームページに掲載させてもらいましたが、日本の昭和初期（1930 年代）、インドはガンジス川中流の聖地ヴァラナシ近郊サールナート（鹿野苑）に建設された仏教寺院本堂の壁に、「釈尊一代記」の壁画が日本人画家・野生司（のうす）香雪によって描かれました。

今から 85 年前に描かれた壁画は「経年劣化によるひび割れや変色を修復したい。ただし、修復は限られた範囲内で、オリジナルの絵の価値を損ないたくない」というのが、所有者であるインド大菩提会の基本的な考えでした。

生前、平山郁夫画伯は「これは優れた日本美術である」と、海外にある日本の芸術作品として高く評価をしておりました。「日本画の修復は日本人の手で行いたい」として結成されたのが野生司香雪画伯顕彰会です。第 1 期工事を終えたものの、コロナ感染のために第 2 期、第 3 期工事は延期したままですが、状況が好転したら直ぐにでも工事を始められるように怠りなく準備を進めています。そのひとつとして、同顕彰会はインド大使館、ディスカバーインディアクラブ（DIC）と共催により「野生司香雪展覧会とフォーラム」を 7 月 16 日から開催します（添付をご参照ください）。

https://www.japan-india.com/release/0348dd4a8717f5b68c0767a85c7e46e2ed419c41

話は変わりますが、野生司香雪画伯を通して広がる「仏縁」か、４月中頃に浅草寺善龍院の清水谷尚順住職にお会いしました。別所温泉・常楽寺の半田孝海師と浅草寺の清水谷恭順師を曾祖父とする方で、曾祖父二人は善光寺雲上殿（納骨堂）の壁画を制作中の野生司香雪画伯と昵懇の間柄だったそうです。「善光寺縁起」は昭和２４年に完成しました。その頃復員した半田孝海師の次男・孝尚氏は、恭順師により浅草寺に迎え入れられたそうです（養子です）。孝海大僧正の長男・半田孝淳師は天台座主、次男・清水谷孝尚師は浅草寺貫主になられましたが、ご存じのとおり二人とも上田高校（前身の上田中学卒）の大先輩です。（孝淳師 34 期、孝尚師 36 期）

今回の講演会には、浅草寺と常楽寺とを結びつけた善光寺白蓮坊の若麻績敏隆住職も登壇されます。善光寺御本尊はインド由来の仏像であると伝えられています。

（2021 年 7 月 1 日）

以上